

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00473

研究課題名(和文) ウィーン・ラジオ放送の文学番組とオーストリア・ファシズムの文化政策

研究課題名(英文) Literary Programs of the Vienna Radio Broadcasting and the Cultural Policy of Austrian Fascism

研究代表者

早川 文人 (Fumito, Hayakawa)

金沢大学・外国語教育系・准教授

研究者番号：30724398

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1930年代のウィーンのラジオ放送総局RAVAGの文学番組やラジオ雑誌から、ラジオと文学というメディアに働く政治的力学を考察し、これまで文学史から抜け落ちていた記述や文学者の態度の彫塑化を目的とした。RAVAGの幹部であった文学者ハンス・ニューヒテルンそしてルドルフ・ヘンツは、ラジオ放送による教化だけではなく大規模祝祭劇を計画・実施するなど、オーストリア・ファシズム政権下でも文化政策において重要な役割を担っていたことを突きとめ、ラジオ放送と大規模祝祭劇などが密接に結びついていた点を確認および検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1933/1934年から1938年3月までオーストリアに成立した権威主義体制、いわゆるオーストリアファシズム体制下のラジオ文化に焦点を当てた本研究は、ラジオ放送を取り巻く文学状況と権威主義体制下の作家の態度に焦点をあてて考察を展開し、これまでの文学史の記述から抜け落ちた側面に光を当てることを目標としている。当該時代の政治構造とその仕組みへのプロパガンダ的性格を伴う文学活動という側面を浮き彫りにすることで、政治的文脈という同時代的視座から個々の文学テキストに新たな読解可能性を示した本研究に備わる学術的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to examine the literary programmes and radio magazines of RAVAG, the general radio station in Vienna in the 1930s, the relationship between radio and literature, and the relationship between the two and their political dynamics, and to model the descriptions and attitudes of literary writers that have been missing in the history of literature. The research focuses on the fact that Hans Nuechtern and Rudolf Henz, literary figures who were executives of RAVAG, planned and implemented not only radio broadcasts but also large-scale "Festspiele" and played an important role in cultural policy even under the Austrian authoritarian regime.

研究分野：ドイツ語圏文学・文化学・メディア史

キーワード：オーストリア・ファシズム ラジオ放送 RAVAG ハンス・ニューヒテルン ルドルフ・ヘンツ 祝祭劇 文化政策 群集

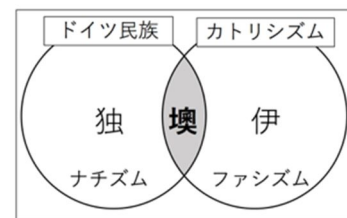
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

第一次大戦後、オーストリアがドイツ系民族中心の小国家として独立の道を歩むことになったとき、カトリック（宗教性）とドイツ系（民族性）に基づいてその正当性を喧伝する必要があった。このような《オーストリア・イデオロギー》は独伊両国家の峽間で醸成され、第一共和国を経て成立した権威主義体制 E・ドルフス/K・シュシュニツク政権（1934-1938）におけるいわゆる《オーストリア・ファシズム》（独語：Austrofascismus）において積極的に展開された。唄ファシズム政権は、まさに独伊の緩衝地帯として、両国家関係の焦点として機能していたので、この政権下の文化研究は、1930年代のファシズム諸国家の文化政策の差異や共通性を測る上でも重要な試金石になると思われる。当該分野の先行研究では、F・アスペーツベルガー（Aspetsberger, 1980）、E・タロシュ（Tálos, 1985; 2005; 2013）、K・アマン（Amann, 1989; 1999）、P・ヤンケ（Janke, 2010）といった唄研究者が先鞭をつけてきた。ただし、唄ファシズム研究、特に文化研究に関しては概して、独伊ファシズムの文脈に回収されてしまう傾向にあり、集中的に論じられる機会は依然として少ない。その理由の一つとして、第一次大戦後から唄国内で続く政治勢力の党派的対立とそれに伴う社会の分断構造の根は深く、今日においてなおこの権威主義体制の歴史的評価はセンシティブな問題として棚上げされる傾向が挙げられよう。以上の学術的背景を踏まえて、本研究は次の問い立てを行い、研究の基軸として展開をすることを試みた。オーストリア・ファシズム政権下においてウィーンの文学者はいかに振る舞い、当該時代の文化政策との繋がりはいかようであったのか？この問いが研究を始動するに至った出発点にある。

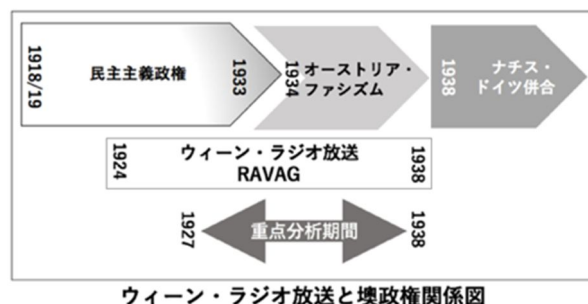
2. 研究の目的

本研究の全体構想は、各国史の枠組において進められてきたファシズム文化史研究を補完・発展させるために、独伊関係の焦点としての唄という視点から、民主主義崩壊の兆しが現れた第一共和国末期（1927-1933）とオーストリア・ファシズム政権下（1933/34-1938）の社会・文化状況を集中的に分析し、1930年代のファシズム諸国家の文化政策の全体像の解明にある。研究期間内での目的は、その喧伝と世論形成、あるいは《文化》の牽引に重要な役割を果たしたウィーンのラジオ放送の文学番組（ラジオ・ドラマ、作家の朗読テキスト）に焦点を定め、台本やラジオ雑誌や年次報告書等から当該時代の文化政策の実際的な影響を考察し、文学番組制作を主導していたハンス・ニュヒテルン（Hans Nüchtern, 1896-1962）やルドルフ・ヘンツ（Rudolf Henz, 1897-1987）を中心とした文学者の振る舞いの検証により、文化政策との距離を測定し、ファシズム文化史に新たな記述を加えることである。



3. 研究の方法

本研究は、RAVAG の文学番組の編成とその文学番組で取り上げられたテキスト、及びニュヒテルンの文学的著作や書簡の分析を通じて、ファシズム政権の文化政策の影響の射程を測るとともに、当該時代の文学者の態度も併せて検証する。1930年代の唄文学研究が、独ナチスによる《併合》の文脈に回収される傾向、あるいは非政治的な文脈のみで論じられる傾向や、またメディア論の枠組では、媒介する個々のテキストの読解・分析が軽視も看取されるなかで、本研究は、唄ファシズムの文化政策とその影響という視座に立ち、メディア（史）論的視座、海外の現地調査そして文献学的手法に基づいてテキスト分析を進めた。



4. 研究成果

研究期間においては計画に基づき、オーストリア・ウィーンのラジオ放送局（RAVAG）の年次報告書および文学番組で取り上げられた個々の作品の読解作業を進めるとともに、オーストリア国立図書館をはじめとする図書館、文学館に保存されているデジタル化されていない資料の存在の確認とそれらの収集を中心に、特に RAVAG 文学番組に関連する文献の収集に努め、分析を行なった。RAVAG の文学・学術部門には、文学番組を取り仕切っていた文学部門長ニュヒテルンと学術部門長として加わったヘンツが中心にいたことを確認し、彼らがラジオだけではなく大規模祝祭劇を企画し、そして演出にも携わり、オーストリア・ファシズム政権下でも文化政策において重要な役割を担っていたことを突きとめ、ラジオ放送と大規模祝祭劇などが密接に結びついていた点を検証、確認したことが研究成果として挙げられる。研究成果の細目については以下にまとめる。

1) ラジオ・祝祭劇文化とハンス・ニュヒテルン

ニュヒテルンと文化活動機関「新生活」(Neues Leben) との関係について、「ハンス・ニュヒテルン——大戦間期ウィーンのラジオと文学を考える手がかりとして」(2018 年 11 月 23 日: 日本独文学会北陸支部)において報告し、さらに第 2 次大戦前の RAVAG の文学番組を概観し、かつ俯瞰的に把握するために、ニュヒテルンという文学者を補助線として、本研究が課題とする時代の分析をするうえでのキーパーソンとして位置づけた。そして当時広まったラジオメディアは、《伝統的》オーストリア文化の称揚にも利用されていたことを検証するために、ニュヒテルンが演出した放送初回のラジオ劇『農夫と死』を分析した。この分析は、論文「ウィーン・ラジオ劇の誕生——ラヴァク黎明期とハンス・ニュヒテルン」(「上智大学ドイツ文学論集」55 号)にまとめ、公表した。ニュヒテルンは、オーストリアの放送劇文化の基礎を築いた人物として評価できる一方、その演出方法には目新しいものはなく、放送番組に取り上げる文学作品もオーストリアの伝統に根差した作品が中心にあった。これら放送劇の作品群をリストアップし、分析する過程でニュヒテルンが創作した作品『赤・白・赤』(Rot-Wei-Rot)に注目した。ウィーンの放送資料館において、放送劇用の台本として整理されていたテキストは、研究する過程において、スタジアムにおいて上演された祝祭劇、ヤンケが定義するところの《群集祝祭劇》、オーストリ・ファシズム時代、職能制身分国家時代の憲法記念日を祝うために用意された祝祭劇に合致したものの、放送劇用として保管されていた台本と当時出版された祝祭劇用の台本との異同に気がついた。このテキストの調査の過程で、RAVAG の中心で活動していた作家ニュヒテルンとヘンツが当該時代の祝祭劇の演出に深く関わっている点に気がつき、ラジオと祝祭劇の接点という研究の展開を見出した。

2) ラジオ・祝祭劇文化とルドルフ・ヘンツについて

RAVAG の学術部門長であったヘンツについても 1930 年代の彼の活動に焦点をあてて資料収集に努めてきたが、その過程においてヘンツが 1930 年にウィーンで開催されたカトリック会議や祝祭劇の台本・演出にも深く関わっていた点に注目した。空前の規模で開催された「カトリック会議 (Katholikentag)」の期間中に、ウィーンのアム・ドム・スタジアムで上演された祝祭劇『聖ミハエルよ、我らを導き給え』は、ヘンツが台本と演出を手がけていた。その台本やカトリック会議の報告書を分析し、論文「オーストリア・ファシズムの群集祝祭劇——ルドルフ・ヘンツ『聖ミハエルよ、我らを導き給え』」(「言語文化論叢」27 号 2023 年, 105-130 頁)で公表した。ヘンツやそして先に言及したニュヒテルンがラジオや祝祭劇といった《メディア》を駆使して、両者が政権の文化政策に寄与した点については、論文「オーストリア・ファシズム体制下の二人のメディア文学者——R・ヘンツと H・ニュヒテルンの群集祝祭劇を手がかりに」(「ドイツ語文化圏研究」20 号 2024 年, 23-45 頁)において公表した。

3) ラジオと作家との関係について

文学者とメディアを取り巻く関係を多角的に考察するために、20 世紀初頭のウィーンを代表する作家アルトゥーア・シュニッツラー (Arthur Schnitzler, 1862-1931) に注目した。そのさい 1927 年 5 月 9 日に RAVAG で放送されたシュニッツラーの作品を取り上げた文学番組に注目した。当時のザイベル政権の教権主義的文化政策の中で編成された RAVAG の文学番組に、自作が取り上げられることに対してシュニッツラーが新聞メディアを巻き込んで行った、「著作権」にかかわる作家の権利についての問題提起、および番組で朗読されたシュニッツラーの作品(『盲目のジェロニモとその兄』『レデゴンダの日記』『三回の警告』)に関する分析を、先行研究および当該時代の新聞・雑誌を手がかりに行った。これらの分析と考察は、論文「1920 年代後半のラジオ放送と文学——1927 年 5 月 9 日放送の RAVAG 文学番組とシュニッツラーをめぐる」(「ドイツ語文化圏研究」16 号 2020 年, 25-45 頁)にまとめ公表した。また独逸の作家や作品にも意識的に注意を向け、例えば独逸作家ヴァルデマール・ボンゼルス (Waldemar Bonsels, 1881-1952) や独逸作家ルドルフ・ブルングラーバー (Rudolf Brunngraber, 1901-1960) に着目した。ボンゼルスのような独逸作家の独逸メディアにおける受容状況の分析は独逸関係の政治的メディア文化史における力学を測る試金石になりうるという認識を得た。またヘルマン・ブロッホが、交流のあったブルングラーバーの RAVAG における 1938 年 1 月 30 日の自作朗読の放送に際して、『ラジオ・ウィーン』(1938 年 18 号)にブルングラーバーの紹介文を寄せていたことにも気がついた。社会民主党支持者であったブルングラーバーも朗読の RAVAG 放送が許されていた点を鑑みると、ドイツに比べ検閲体制の緩さ(あるいは文学者への理解)があったとも指摘できよう。ブロッホとブルングラーバーとの関係の調査を進め、今後、論文として公表する予定である。

4) ラジオと祝祭劇そして群集との関係について

ニュヒテルンとヘンツが深く関わっていたラジオ放送と聴衆の関係、大集団で上演された祝祭劇などを読み解く一つの手がかりとして、群集／群衆の問題に関する知見を深める必要が生じ、RAVAG との関係もあったヘルマン・ブロッホの群集論や 1930 年代に描かれた文学作品についての考察も始めた。海老根剛氏 (大阪公立大学)・古矢晋一氏 (立教大学) が取り組む「世紀転換期から第 2 次世界大戦後までのドイツ語圏における群集思考の歴史的展開」の研究会に参加し、ブロッホの群集に関する理論的著作(『群集狂気論 (Massenwahntheorie)』)に関する報告

を行い、さらに 1930 年代のオーストリアの政治状況を踏まえて群集祝祭劇『赤・白・赤』とほぼ同時期に執筆されたブロッホの小説『魅了（呪縛）』（Die Verzauberung, 1936）にも注目し、分析をした。集団行動が求められる群集祝祭劇とは対照的に、ブロッホは《村の祭り》で理性を失った群集の狂乱を描いている。個々のテキスト（新聞／ラジオ雑誌なども含む）の分析を通じて、ラジオの放送劇や文学作品のいわば不可視の群集表象と群集祝祭劇という観客と演者が一体化した可視的で体験可能な場という両者の相互依存関係にも注目した。これらの研究成果の一部として、ブロッホの『魅了』で描かれる、『迫害群衆』の暴力の対象となった代理業者ヴェチーに焦点をあてて分析した報告（「ヘルマン・ブロッホ『魅了』における代理業者像について」2022 年 2 月 19 日）を行い、その後論文「H・ブロッホ『魅了』における代理人像と 1930 年代オーストリア」（「ドイツ語文化圏研究」19 号、2023 年）としてまとめた。この《群集》という視点に関しては、日本独文学会のシンポジウムで海老根氏、古矢氏と糸田文氏（慶應大学）とともに群集論をテーマとしたシンポジウムに登壇者として加わり、ブロッホの作品にみられる群集表象に関する報告を行った（日本独文学会、2023 年 10 月 14 日）。さらに同時代の演劇状況を確認する点も含め、ブロッホの戯曲『贖罪』（1935 年初演）について、新即物主義、群集という視角から発表した（日本グリンパルツァー協会、2023 年 11 月 13 日）。1930 年代前半の祝祭劇という文脈においては、唄ファシズム政権のもと、ヘンツやニュヒテルンらが多様だった祝祭劇を唄ファシズム様式に集約していった。権威主義的政治体制下の中でも政治的圧力を潜り抜けながら、そのイデオロギーから逃れた演劇もまた上演されていた。その一つの好例として、オーストリアの隣国スイス・チューリッヒで上演された戯曲『贖罪』に注目し、戯曲における集団描写、暴動シーンに注目して分析した。その結果、ブロッホの『贖罪』では、ト書きの指示からも極力、それらの描写が控えられている点が判明した。ただし、この点については、政治的抑圧が進む時代状況に起因するのか、ブロッホの美学に基づくものなのか、その両者の視点から考察する必要性を認識した。なおブロッホの小説美学や群集論については、「H・ブロッホ『ウェルギリウスの死』における農民像、あるいは反プロメテウスの楽園の夢——『群集狂気論』を手がかりに」（「言語文化論叢」2023 年）において、ブロッホの心理学受容面に関しては、「ヘルマン・ブロッホのアンフィトリオニズム」（「上智大学ドイツ文学論集」2023 年）において公表した。

5) ラジオ雑誌とその文体について

1920 年代後半から 1938 年代のウィーンのラジオ雑誌を分析する過程で、その媒体の特質や文体にも注目していった。フェュルトン（Feuilleton）としてのラジオ雑誌という観点について、2023 年 8 月には、グラーツ大学ケルンマイヤー教授を日本に招聘し、信州大学や金沢大学での研究会の開催（Kolloquium I, II : An der Grenze schreiben: Feuilleton und Moderne, 28 u. 29. Aug. 2023）や滞在期間中に研究打ち合わせを積み重ねることができた。その際、ラジオ雑誌という媒体の特質に注目する観点からの報告を行った。このラジオ雑誌と Feuilleton という観点は今後の研究の展開を促す視座と言えよう。

研究代表者は、本研究課題を推進する過程において、ラジオ放送とオーストリア・ファシズム体制下の祝祭劇が密接に関係している点について気がついた。この気づきを研究課題として構想し、2023 年度に基盤研究（C）「オーストリア・ファシズムにおける政治的群集祝祭劇とラジオ放送に関する研究」（23K00438）の採択を受けた。これもまた本研究課題が基盤となり、そこから展開した成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 早川文人	4. 巻 60
2. 論文標題 ヘルマン・ブロッホのアンフィトリオニズム	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 上智大学ドイツ文学論集	6. 最初と最後の頁 115-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —
1. 著者名 早川文人	4. 巻 20
2. 論文標題 オーストリア・ファシズム体制下の二人のメディア文学者—R・ヘンツとH・ニュヒテルンの群集祝祭劇を手がかりに	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ドイツ語文化圏研究	6. 最初と最後の頁 23-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —
1. 著者名 早川文人	4. 巻 19
2. 論文標題 H・ブロッホ『魅了』における代理人像と1930年代オーストリア	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ドイツ語文化圏研究	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —
1. 著者名 早川文人	4. 巻 27
2. 論文標題 H・ブロッホ『ウェルギリウスの死』における農民像，あるいは反プロメテウスの楽園の夢—『群集狂気論』を手がかりに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 131-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 早川文人	4. 巻 27
2. 論文標題 オーストリア・ファシズムの群集祝祭劇—ルドルフ・ヘンツ『聖ミヒャエルよ、我らを導き給え』について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化論叢	6. 最初と最後の頁 105-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1. 著者名 早川文人	4. 巻 16
2. 論文標題 1920年代後半のラジオ放送と文学—1927年5月9日放送のRAVAG文学番組とシュニッツラーをめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ドイツ語文化圏研究	6. 最初と最後の頁 25-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1. 著者名 早川文人	4. 巻 55
2. 論文標題 ウィーン・ラジオ劇の誕生—ラヴァク黎明期とハンス・ニュヒテルン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上智大学ドイツ文学論集	6. 最初と最後の頁 187-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 早川文人
2. 発表標題 ヘルマン・ブロッホ『魅了』（Die Verzauberung, 1935）における代理業者像 について
3. 学会等名 日本独文学会北陸支部学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 早川文人
2. 発表標題 ハンス・ニューヒテルンー大戦間期ウィーンのラジオと文学を考える手がかりとして
3. 学会等名 日本独文学会北陸支部学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 早川文人
2. 発表標題 Neue Sachlichkeitと群集の声ーH・ブロッホの戯曲『贖罪』について
3. 学会等名 日本グリルパルツァー協会研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 早川文人
2. 発表標題 未解決の問いとしての群集ーH・ブロッホの群集思想と小説美学
3. 学会等名 日本独文学会秋季研究発表会シンポジウムⅠ：「群集」を再訪するーただしパトスなしに。両大戦間期ドイツ語圏の文学における群集表象の再検討
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Fumito Hayakawa
2. 発表標題 Referenzierte Alternative: Feuilletonismus und Radiozeitschriften
3. 学会等名 An der Grenze schreiben: Feuilleton und Moderne: Kolloquium II
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 畠山寛, 吉中俊貴, 岡本和子編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 258
3. 書名 ドイツ文学の道しるべーニーベルンゲンから多和田葉子まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ケルンマイアー ヒルデガルト (Kernmayer Hildegard)		
研究協力者	葛西 敬之 (Kasai Takayuki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 An der Grenze schreiben: Feuilleton und Moderne: Kolloquium I, II	開催年 2023年～2023年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストリア	Karl Franzens Universitaet Graz			